



館長だより

山形県産業科学館

令和6年12月26日(木)

発行 館長 加藤 智一

ゆるつら

毎年恒例となっている、㈱日経 BP が発表する「2025 ヒット予測 100」。注目トレンド第1位は、「脳サポート」。膨大な情報が飛び交う現代社会にあっては、必要な情報をいかに効率よく整理し、活用できるかが求められています。その中で、「脳サポート」として注目される商品やサービスが次々と登場しています。今回のランキングでは、情報処理やコミュニケーションを支援する革新的なツールが高く評価されました。これらは、AI 技術を駆使して個々の生活スタイルに合わせたサポートを提供し、日常の利便性を大きく向上させる可能性を秘めています。中でも注目度 No.1 は、「肩掛けプライベート AI」。肩掛けといってもショルダーバックみたいな物ではありませんよ。見た目は、夏に熱中症対策で、ヘッドホンみたいに首に引っ掛けて使用するクーラーに似ている。まだ市場には普及していません。このデバイスは、膨大な情報を処理し、ユーザーに必要な情報をピンポイントで届けることを目的とし、ビジネスシーンでの情報整理や日常生活でのパーソナルアシスタントとしての活用が期待されています。

続いて注目トレンド第2位は、「サードプレイス」。家庭でも職場でもない「第3の場所」に人が集まり、共通の趣味や目的を共有する場として注目されています。家庭や職場というのは、人にもよりますが、多くのストレスに晒される場所でもあります。「喧嘩が途絶えない」「上司に怒られる」「結果が出ない」「仕事でミスをしてしまった」など、生活をするだけで疲れてしまうことも少なくありません。こうしたストレスから解放され、一時的にでも自分らしくリラックスして過ごせる場がサードプレイスであり、ストレス要因が多い現代社会において、昨今重視されています。

そしていよいよ注目トレンド第3位は、「ゆるつら」。何だか分かります？私も初めて聞いた言葉です。「ゆるつら」とは、「楽をしたいが、それなりにやっている実感も欲しい」という相反するニーズを満たすトレンドなのだそうです。今年は何かと「タイパ」が叫ばれた年でしたので、その反動でしょうか。例えばセブンイレブンが開発した冷凍食品シリーズ「クックイック」は、鍋に入れて火にかけるだけで料理が完成します。この「鍋を火にかける」という行動

が問題。「レンチン」には無い「ひと手間」がここにはあります。これが良い。だからゆる〜く、ちょっとだけ辛いで「ゆるつら」。ヤツタ感を演出する仕掛けです。思えば私が愛用している、電動アシスト自転車もその類と思われます。通常ママチャリで跨線橋を渡りきるには結構息が切れる。時には立ち漕ぎしたりして。それに比べて電動アシストは勿論座ったままで、しかもギアはトップに入れたまま、スイスイと昇っていきます。高校生の通学自転車を数台追い越して、登り切った先にあるのは、ちょっとした優越感と達成感。これを「ゆるつら」と呼ばずして何とする。



「齋藤 清」木版画に思う

福島県河沼郡柳津町に町営の齋藤清美術館があります。にわかに脚光を浴びている「JR 只見線」の沿線、只見川沿いにそれはあります。私が好きな彼の作品は「会津の冬」シリーズ。幼年期に北海道に移住し、30代前半に帰郷を果たし、「会津の冬」というテーマに出会いました。本人は生涯のほとんどを東京と鎌倉でくらしましたが、毎年のようにスケッチをしに会津に通っていました。私がこの作品を見て感じるのは、寒々とした空気感だけではありません。その内にある温もりです。雪国に暮らす者、暮らした事があるものならだれでも共感できる感性がそこにあります。

